

広汎性発達障害の子どもを持つ家族に関する研究の 動向と今後の課題

臨床心理学コース 大西真美

Review of Researches on Families who have Children with Pervasive Development Disorder

Mami OHNISHI

This study reviews the researches on families who have children with Pervasive Development Disorder. The purpose is to describe what kind of experience families had in the history, and what kind of supports they need today.

First, I focused on researches on family who have children with Autism. Autism has a long history, and their supports have expanded in many areas as families and communities. Then, I focused on the studies about families who have children with High Functioning Pervasive Development Disorder. The studies suggest the importance of understanding the children's inner world and connecting the people around them.

目次

1. はじめに
2. 自閉症の家族研究の動向
 - A. 親の特性に注目した研究
 - B. 親を共同治療者として位置づけた研究
 - C. 親の障害受容とストレスに注目した研究
 - D. コミュニティに根づいた家族支援に関する研究
3. 高機能広汎性発達障害の家族研究の動向
 - A. こどもの「育てにくさ」と「この子らしさ」に関する研究
 - B. コミュニティの中で関係をつなぐための支援に関する研究
4. 高機能広汎性発達障害の子どもとその家族に関する今後の課題

1. はじめに

現在、広汎性発達障害に対する社会の関心は、これまでにないほど高まってきており、教育・労働・医療・福祉などの多くの領域において発達障害への支援が議論されている。平成16年には発達障害者支援法が成立され、発達障害に関わる支援は整備されつつあると言えよう。

今日では広汎性発達障害に対する支援には、発達障

害を持つ本人だけでなく、養育者となる家族への対応も重視され、さまざまな取り組みが実践されるようになってきている。この動向は比較的新しいものであり、必ずしも初期から専門家集団の間でこのような理解が共有されていたわけではない。そのため、本人および家族は周囲の障害への理解や対応をめぐり、色々な経験を重ねることになった。本研究では、これまで家族がどのように扱われ、どのように支援され、どのような研究がなされてきたかに焦点をあて、これまでの広汎性発達障害の子どもを持つ家族に関する研究を見直し、整理することを目的とする。研究の歴史が長い自閉症の家族に関する研究を第一に取り上げ、それを踏まえて現在特に注目されている高機能広汎性発達障害への支援や研究に関して、家族という視点から現状と課題を検討したいと考えている。

広汎性発達障害とは、DSM-IVおよびICD-Xでも採用されている概念であり、その中核となる障害は自閉症である。1996年には、Wingが自閉症をスペクトラムとしてとらえる概念を提唱した。それによって、Kanner(1943)の提唱した自閉症に、Asperger(1944)の提唱したアスペルガー症候群、さらにその周辺にあるどちらの定義も厳密には満たさない一群を加えた比較的広い概念が導入されるようになった。本研究の第2章では、カナリーの提唱した自閉症を主に取り上げる。そして第3章で、知的な遅れのない高機能自閉症やア

スペルガー症候群と呼ばれる高機能広汎性発達障害に関する最近の家族研究と支援についてまとめ、第4章で今後の課題について検討する。

2. 自閉症の家族研究の動向

自閉症に関する研究は、すでに60年以上の歴史を持つ。長きにわたって研究が蓄積されたことで、多くの理論と技法を生みだしてきた。自閉症に対する支援も整備され、ドラマや映画などのメディアを通して、現在では多くの人々が自閉症について理解するようになってきている。第2章では、カナーが発見してから現在に至るまでの自閉症に関する家族への支援や研究についてまとめる。

A. 親の特性に注目した研究

自閉症の子どもを持つ家族に対する言及は、1943年にカナーが「早期幼児自閉症」として11人の症例を報告した中にもすでに認められる。カナーは、「知的に高い両親」「冷たく孤立したおもしろみのない完全主義者」「心温かい父親や母親はほとんどいなかった」などの記述によって、家族の特性について述べた。同時に、彼は「人生の始まりから子どもたちは孤立していた」とも述べ、生まれ持った傾向の可能性を示唆し、心因が唯一の病因ではないと主張したのだが、両親は自閉であることに力動的に影響を与えていると考え、ここからしばらくの間、心因論を支持する研究(Eisenberg, 1957; Block, 1958; Klebanoff, 1959; Call, 1963)が多くなされるようになった。このような専門家の理解に、この後両親は長い間悩まされることになった。

我が国においても、黒丸らの研究(1964)に続いて、田中(1966)は、家族の力動に注目すべきであると主張し、家族が発展する経過を事例的に辿りながら、子どもの精神発達に父母の特性が与える影響を取り上げて論じている。家族全体の力動関係をとらえることの重要性を早く主張し、子どもの成長に親が関わるプロセスをとらえていながらも、親の特性を否定的に描写した記述が多く、親子が相互に影響し合う関係性まではとらえきれずに、親から子どもへの一方的な関わりだけが強調された。両親の特性をめぐる研究が行われた流れに対して、一石を投じたのが久保(1969)の研究である。久保は、これらの研究の問題点を指摘している。第一に、当時の診断基準が明確でなかったために疾病概念が曖昧であったこと、リサーチ方法の問題として主観的な印象の記述が多いこと、そして親の特性

を病理として結びつけるにはその程度が言及されていないこと、さらに治療においては親の特性よりも、親が子どもを抱えてどのように生きるのかという点が重要になると述べている。こうして1960年代の終わりまでには、親の特性が子どもの障害の原因であるとみなす研究は批判されるようになった。治療においても、当時は主として子どもが対象とされ、親が育めなかった子どもとの絆を治療者と子どもとの間で遊戯療法を通して確立することが求められた。親に対しては、子どもを理解し、絶対受容することを目的とした親へのカウンセリングが専ら行われた(小澤, 1984)。

心因論を支持する研究は、その後大々的に非難されることになり、親の特性や関わりが直接子どもの自閉症を生みだすとする考えははっきりと否定された。現在においては、遺伝子レベルでの研究が進み、遺伝的なつながりについての研究が生物学的なレベルで行われるようになってきている。つまり、環境や心理的なレベルでの因果関係は否定され、遺伝子という形、生物学的なレベルでのつながりが注目されるように変化してきた。

B. 親を共同治療者として位置づけた研究

1960年代末期からは、Rutter(1968)が自閉症の中核症状を、先天的な器質的要因によって生じる言語と認知の障害と考える「言語・認知障害説」を発表したことにより、新たな治療法が次々と生み出されるようになった。1960年代には、Ferster(1961)による行動療法を用いた治療も始まり、その流れがLovaasら(1973)に引き継がれて、行動療法によるアプローチが注目を集めた。それまでの心因を考慮した治療において、親を子どもの治療から排除していた方法(Bettelheim, 1967)から一転し、親は子どもの問題の原因などではなく、援助や助言、訓練を求めて悩む人として、また子どもの治療と一緒に携わる共同治療者として位置づけられるようになった。ロバース(1978)は、様々な行動療法を実践するにあたり、親を治療者として訓練し、家でも治療を継続して行うことによって、治療の成果を見出した。また、行動療法を行うに際し、早期に集中的に介入すること、即ちそのために早期に発見して早期に治療を行うことの重要性が強調された。

Schoplerら(1984)により開発されたTEACCHも、代表的な親訓練プログラムの理論と技法の一つである。TEACCHアプローチによる家族への対応は、親と専門家の間で共同作業的な関係を築くことが重視され、親は訓練を行うパートナーであり、トレーニーとして

の役割を担う。TEACCHの主要な指導概念は構造化である。自閉症を持つ子どもが、世界を系統立てて理解することを援助するため、生活に見通しを立て、ルーチンにあてはめて、環境を整えることが重要だと考えられている。TEACCHの理論と技法は、行動療法のテクニックを教育プログラムの中に統合したものであり、数年にわたる縦断研究から、子どもの行動の変化や子どもと関わる親の能力の増加など、効果のあることが実証的に確かめられている(Marcus, Lansing, Angrews, Schopler, 1978; Schopler, Mesibov, DeVellis, Short, 1981; Schopler, Mesibov, Baker, 1982; Short, 1984)。TEACCHの理論と技法は、現在でも自閉症の療育において重視されている。ライフサイクルに伴う変化に合わせ、生活に必要なスキルの習得に上手く取り入れられている。

C. 親の障害受容とストレスに注目した研究

1970年代から1980年代にかけて、行動療法やTEACCHなどの実践的な治療が見出されるようになったことを受けて、1980年代からは、養育する家族が子どもに向き合う際のプロセスとしての障害受容に関する研究、そして、養育する家族のストレスに注目した研究が盛んに行われるようになった。これらは、親のどちらかと言えば否定的な特性や養育態度に注目した1970年代までの研究とは異なり、いずれも子どもの養育にあたる家族をサポートする対象とした観点からなされた研究である。

親の障害受容に関する研究の先駆けとしては、1975年にDrotarらが先天性奇形の子どもの親を対象に行った研究がある。彼は、親が障害に向き合うプロセスを「衝撃」「拒否」「悲しみと怒り」「順応」「再起」の5段階に記述し、段階説を提唱した。これに対してWiklerら(1981)は、精神発達遅滞の子どもの親を対象に研究を行い、明確な段階を辿るのではなく、発達の節目ごとに慢性的な悲哀が起こるという慢性的悲哀説を支持した。日本の中田(1995)はまた、悲哀は常にあるのではなく、健常な子どもでは当たり前の発達の・社会的な出来事に対し、潜在的なきっかけとして悲哀を引き起こすとして螺旋形モデルを主張した。

自閉症の障害受容に関する研究からは、自閉症がダウン症・脳性麻痺・精神遅滞などの障害のように「ショック」や「否認」で始まるのではないこと、むしろ「不安」を強く抱きやすいことが指摘された。(鈴木ら, 1985)。そして山崎ら(2000)は、自閉症の子どもを持つ母親が障害児の母親であることに肯定的な意味を見出すまで

のプロセスを「不安」「闘争」「運命への順応」「障害の理解と究明への探求」「最適環境の追及」「自己肯定」へと変遷することを明らかにしている。これらは、いずれも親が子どもの障害に向き合う過程で直面する体験に注目し、その苦しみや困難に注目した研究である。障害受容に関する研究は、障害告知の問題と関連して行われ、障害の気づきから障害の告知、そしてその後まで、長期にわたり家族を支援する重要性を指摘した(穴倉・宮田, 1997; 永井・林, 2004)。

親のストレスに関する研究は、植村・新美(1981)がストレス尺度に関する研究を行ったことをきっかけに一層注目されるようになった。多くの研究(Donovan, 1988; 稲浪ら, 1980; 今川ら, 1993)が、自閉症を持つ子どものいる家族のストレスは、他の障害を持つ子どもの家族と比較しても高いことを指摘している。その要因に関して、有川(2002)は、子どもの問題行動及び認知・言語などの障害特性に起因するもの(植村・新美, 1981, 1987; Bebcu, Konstantareas, Springer, 1987)、地域社会との関係性から生じるもの、社会資源に対する不満からくるもの(新美・植村, 1985)、将来への不安によるもの(Donovan, 1988)、家庭内の関係(Holroyd, McArther, 1976; 蓬郷・中塚, 1989)、子どもへのケアに対する家族の負担(Holroyd, McArther, 1976; 稲浪ら, 1980; 小椋ら, 1980)など多岐にわたるものがあると分析している。そして北川ら(1995)は、親の養育上のストレスを減らすためのサポートとして、夫婦親密性サポートや療育的サポート、近隣的支持が必要であること示した。

親の障害受容に関する研究やストレスに関する研究が進む中で、親の抱えるストレスがこれまでみてきたように明らかとなって、支援の幅も格段に広がってきた。これらの研究が盛んになった背景に、自閉症の子どもを持つ家族による「親の会」の成立も大きく関与していることを最後に指摘しておきたい。親の会は、アメリカでは1965年から、日本においても1968年に結成され、徐々にその活動も広がってきた。親の会を立ち上げた家族たちは、研究に協力することで、周囲の理解を得られるようになり、支援を広げてきたと考えられる。

D. コミュニティに根づいた家族支援に関する研究

自閉症の子どもを持つ家族が強いストレスを抱えていることの発見は、コミュニティにおける社会支援が重要な意味を持つという認識を促した。社会支援のあり方には、医療や療育施設、あるいは制度化されてい

る公的援助を主とする「フォーマル・サポート」と、家族や親戚、知人や隣人、ボランティアからなる援助を主とした「インフォーマル・サポート」があると言われている(伊藤ら, 1997)。ここではそれぞれに焦点をあて、現状を捉えたい。

「フォーマル・サポート」について、有川(2002)は、自閉症の子どもを持つ家族に対するコミュニティ支援の在り方は、施設への入所から地域生活を基盤とするものへと利用者のニーズに合わせて、転換されてきたことを指摘している。厚生労働省(2002)は、専門の相談支援や適切な療育サービスを提供する拠点として、各地域に「発達障害支援センター」を附置した。また家族支援サービスの一つとして、ショートステイやレスパイトサービス事業なども実施されるようになってきており、家族のケアにおいて大きな役割を果たしている(吉田, 2002)。今後の課題として、小さな子どもばかりでなく、学齢期を終えた若者に対する就労支援を行うための就労支援ネットワークの育成など、ライフステージに合わせた社会支援の展開が期待されている(松為, 2001)。

「インフォーマル・サポート」について、中心的な役割を果たしてきたのは「親の会」であるが、自閉症の子どもを持つ家族に対するサポートが、最近では本人や親だけでなく、きょうだいにも目が向けられるようになってきた。自閉症の子どものきょうだいにも、親と同様にストレスを抱えているとし、Siegelら(1994)はきょうだいを「親代りする子ども」「優等生になる子ども」「退却する子ども」「行動化する子ども」という類型に区分している。きょうだいを含めた家族支援の必要性から、きょうだい会も結成されるようになってきている(西村, 2004)。

このように自閉症の子どもを中心としながら、家族、そしてコミュニティへと支援の輪は広がり、多くの人の理解が得られるようになってきている。

3. 高機能広汎性発達障害の家族研究の動向

第3章、4章では、本論のもう一つのテーマである高機能広汎性発達障害の研究動向を概観する。高機能広汎性発達障害に関する研究は、1990年代に入って行われるようになった。大きなきっかけとなったのは、世界の様々な国から、高機能広汎性発達障害による自伝や伝記が数多く出版されたことである(Grandin, 1986, 1995; Williams, 1992; 森口, 1996)。彼らの手記により、高機能広汎性発達障害の体験世界を理解で

きるようになったことは大変大きく、高機能広汎性発達障害の子どもが体験している世界の独自性が焦点化されるようになった。そして、高機能広汎性発達障害の子どもをどのように育てるかという親の子育てをめぐる問題、コミュニティの中でのどのように支援するかという点が目下の重要な争点となっている。

A. 子どもの「育てにくさ」と「この子らしさ」に関する研究

親のインタビュー研究(高橋, 2004; 師田, 2005)が行われ、自閉症の子どもに比べて高機能広汎性発達障害の子どもたちの特性は、個々の子どもによって大きく異なることが分かるようになってきている。親たちの子育ての経験はそれぞれユニークで、多様性があり、一つの記述にあてはめることは難しい。自身も高機能自閉症の子どもを育てる母である高橋は、高機能広汎性発達障害の子どもを、高機能自閉症とアスペルガー症候群に分けて、親の子育ての経験をまとめているが、その分類でもさらに細かく分けなければ把握できないほどに多様な経過を辿っている。このように子育ての経験は、子どもの持つ特性によって大きく異なり、一概に同じ経験を辿るとは考えにくい。しかし、親として子育てを経験する中での、親の内的体験はいずれの特性を持つ子どもの親であっても、「親である自分は不完全だったのではないか」という思いに責められ、大きな試練にぶつかると述べている。このように親の内的体験としては、いくつかの共通する感情を抱くと考えられる。その一つに、「育てにくさ」という感覚が挙げられる。

根来ら(2004)は、主観的育てにくさを測定する質問紙を作成し、検討を行った。そこから主観的育てにくさにつながる要因として、子どもと母親の両側面があることを指摘している。また山本(2005)は、親子の間で起こる負の循環を、インタビューをもとに描き出した。子どもの障害に対する曖昧な理解やラベリング、扱いにくい子どもの行動特性、そして他者から責められるような思いが、体罰などの親の否定的な関わりを生み出す可能性が示唆されている。親の被害的な感情には、実際に世間から言われて傷ついたこと、教育相談や心理相談員やカウンセラーからのアドバイスや励ましの言葉にかえって傷ついたこと、母親の想像の中での非難の声による傷つき、子どもに対する苛立ちと責め、子どもからの責め、なかなか協力を得られない家族からの傷つきなどが含まれている。これらの研究が示すように、子どもに対するあいまいな障害のラベ

リングにより生み出される誤解や偏見、差別の問題、またそのことで生み出される親の被害的な感情、さらには親自身の子どもへの対応の難しさからくる否定的な対応が、高機能広汎性発達障害の子どもたちの「育てにくさ」と関わっていると考えられる。柳楽ら(2004)は、子どもの障害をどのように理解し受けとめるかが、高機能広汎性発達障害においても重要になると述べている。柳楽らは、アスペルガー症候群の子どもを持つ母親を対象にインタビューを行った結果、障害として対応しつつ、「この子らしさ」を尊重することの重要性を指摘している。高機能広汎性発達障害の場合には、診断がなかなか確定しないことも多く、普通になるのではないかという期待も一層大きいことから、子どもに対する大きな葛藤を長い間体験しなければならない。障害として援助することと、個性として見守る立場の両方がともに必要であり、長く続く葛藤が親を追い詰めてしまわないよう援助することが必要であると述べている。

これらの親の思いを支える役割を担うものの一つとして、「親の会」がある。親の会には、様々な役割があり、子どもとのかかわり方に対する具体的で現実的なアドバイスを交換する場にもなっている。また親としての苦労の経験を互いに語り合うことにより、その他の社会集団との差異を明らかにし、独自の共通理解を生み出すことができる。高機能広汎性発達障害の中でも、軽度発達障害の「親の会」の語りを分析した山口ら(2005)は、軽度発達障害というものが他の社会状況やカテゴリーと対比した形で繰り返し語られていることを見出し、これは軽度発達障害が公的援助の対象から外されている状況によるものと考えられることを指摘した。軽度発達障害の親の語りには、ストーリーを語ることで、自分たちの現実を定義し、自らの抱える問題の正当性を主張し、不安を軽減させるとともに、社会的圧力に抵抗し、軽度発達障害の子どもを持つ親というアイデンティティを形成していく過程となると述べている。

このように、高機能広汎性発達障害の子どもは、それぞれ独自の発達過程を進むことから、家族の子育ても独自の工夫が求められ、独自の関わりが家族の中で形成されると考えられる。

B. コミュニティの中で関係をつなぐための支援に関する研究

自閉症と異なり、高機能広汎性発達障害の子どもが、しばしば高い知能を持つことは、彼らの援助という点

ではずっと手薄な状態で、コミュニティの中で自分の力で生活する現状を余儀なくさせている。そしてコミュニティで暮らすために、いじめの問題に遭遇する高機能広汎性発達障害の子どもたちも少なくない(杉山, 2000)。この状況は深刻であり、学校の中での支援が早急に必要となっている。

2007年より始まった特別支援教育も、このような現状を受けて実施されるようになったものである。しかし、山崎(2006)は特別支援教育が実施される中での問題点について、学級の整備が立ち遅れていることや、個別の教育支援計画を立てることの難しさ、教師の発達障害への知識の個人差、発達障害に関する専門家の不足などを挙げている。同じく江幡ら(2006)は学校の中での支援の在り方を検討するため、教員と親の双方に対して調査を行い、今後の支援には結果や評価を求める指導中心の姿勢だけでなく、親の持つ苦しみや悲しみ、喜びなどの心の揺れに付き添う姿勢の重要性を指摘している。また、渡部ら(2007)の研究においても、生徒一人一人の子どもが尊重されるような雰囲気のある学級では、高機能広汎性発達障害の子どもも適応しやすい環境であることが見出された。このように、高機能広汎性発達障害に対する学校での支援に関しては、子どもの状態を正確に把握するとともに、その情報を周囲に関わるものと共有し、さらに保護者との間においても良好な関係を築くことが重要であるとされている。

また学校だけではなく、社会や職業生活への移行も重要な課題になっている。進路選択においては、自分に対する理解をどのように形成するかということが重要なことになってくると考えられる。辻井(2004)や吉田(2004)は本人への障害の自己理解は必要であると一貫して述べているが、「誰が」「いつ」「どのように」説明するか、そのその後のフォローアップもどのような形で行い、障害理解や自己理解をどのように深めていくかについては手探りの状態である。樋口(2006)は、中学生と高校生の高機能広汎性発達障害の子どもを持つ親に対するインタビューから、親が子どもに対して障害の告知をすることに対して良いと考えているケースが少なく、就職に関しては最も悩む問題でありながら、子どもの成長と障害雇用の促進に期待して進学先の先延ばしを決定する親が多いことを明らかにした。このような現状においては、本人が自分に対する理解を深めるためには、家族をはじめ、コミュニティ全体の理解が必要であることを示していると考えられる。

コミュニケーションや人との関係において困難を抱

しやすい高機能広汎性発達障害の子どもたちが、コミュニティの中でよりよい生活を営むために、今後は周囲との関係をつなぐための支援が期待されている。

4. 高機能広汎性発達障害の子どもとその家族に関する今後の課題

自閉症の子どもたちへの支援は広がり、家族全体を支えるということや、地域との関わりにも重点が置かれ、支援の充実が図られてきた。このような背景には、自閉症に関する情報が、様々な形で普及してきたこともその要因の一つと考えられる。多くの人々が自閉症について正しく知ることにより、今までは一部の組織に委ねられていた支援が多くの人に理解を求められるようになってきている。

高機能広汎性発達障害においても、同じようにその概念は広まろうとしている。しかし自閉症と大きく異なる点として、まずはその障害の特性には個人差が大きいことである。個々の体験している世界が異なるために、一つの型にあてはめた支援を構築することが難しい。そのため、個々の子どもたちにあった支援を模索する必要がある。周囲の関わりも多様性を求められることになる。こうした現状の中で、高機能広汎性発達障害の子どもを持つ親たちは、子どもの特性を正しく理解し、子どもの抱える困難に向き合う苦しい作業の上に、さらにそれを学校やコミュニティの人に正しく伝え、理解を求めていかなければならない。医療や教育などの多くの領域を跨って、生活している子どもとその家族は、支援を受けるためにも、まずはコミュニケーションを十分に取ることが求められる。親は子どもの特性を正しく周囲に伝え、また正しい支援を要求するコミュニケーション力が問われる。よりよい支援を得られるように、家族はコミュニケーションをとる能力が必要になるが、コミュニケーションをとることはそう簡単ではない。周囲に対して多くの配慮を必要とし、それ事態に苦しさを訴える親も多い。むしろ支援を求めていくことに大変さを感じている場合もある。そのためには、支援を行う人たちも他の領域とより関係を強固なものとし、互いにコミュニケーションを取り合っていく能力が求められると考えられる。もちろん情報の共有においては親の許可も必要であるが、地域全体がコミュニケーションのとれる豊かでオープンな関係でいられることにより、子どもを育てる親たちへの支援になるのではないだろうか。

二点目には、高機能広汎性発達障害の問題が単独で

はなく、その他の問題と複合的に関わって、多様な問題を抱える家族もいることが分かってきている。その例として、虐待との関連や非行や刑事事件、家庭内暴力との関連である(藤川, 2005; 田中, 2006)。このような家族に対しては、発達障害としての支援やアプローチでは十分に対応できないこともあり、より細やかな視点で支援が必要になる。高機能広汎性発達障害と暴力の関係は、よほど負の条件が重さならない限りは起こらないものの、過去の暴力にさらされた体験が忘れられずに、小さなきっかけをもとに新たな暴力を生みだし、過去をなかなか封印できないフラッシュバック記憶との問題が指摘されている(藤川, 2000)。このような問題に対しては、様々な専門知識を持ち、支援方法を幅広く選択することが必要とされるだろう。

三点目として、高機能広汎性発達障害の持つ生きにくさにどれだけ私たちが理解を示し、彼らとの違いをどれだけ受け入れる社会となるかということが社会全体の課題になると考えられる。同質性を求めやすい日本の国民性においては、違いを受け入れ、自分のあり方や考え方を変化させていくことはなかなか困難な課題である。しかし、実際に高機能広汎性発達障害の子どもや大人とともに生活をしていく上では、ある程度の変化は必要であるし、互いにより良き環境を築いていくことが求められるだろう。

広汎性発達障害に関する研究が進展したことにより、子どもの発達を評価する視点が細やかになり、発達障害を持つ子どもの状態把握が細分化されてきたと言えるだろう。そのため、今まではあいまいに育てられてきた子どもたちも、厳しい評価の目を受けることになっている。村瀬(2006)は、これからの支援において重要なことは、障害としての視点だけでなく、子どもがどんな世界を体験して過ごしているかということに注目し、子どもの状態を総合的に把握することであると述べている。このように子どもを総合的にきちんと把握する力と同時に、その家族やコミュニティとのつながりをいかに育成していけるかが今後の支援において問われることになるだろう。

(指導教官 中釜洋子准教授)

文 献

- 穴倉孝・宮田栄一 1997 横浜市の自閉症の診断を家族の立場で検討する 研究助成論文集, 33, 160-168.
 Asperger, H. 高木隆郎(訳) 1944(訳2000)小児期の自閉的精神病質 高木隆郎・ラター, M・ショプラー, E.(編) 自閉症と発達障害研究の進歩 2000(4) 星和書店, 30-68.

- 有川宏幸 2002 研究時評 自閉症児・者を持つ家族への地域支援のあり方 特殊教育学研究, 40(4), 429-434.
- Bebko, J. M., Konstantareas, M. M., & Springer, J. 1987 Parent and professional evaluations of family stress associated with characteristics of autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 17, 565-576.
- Bettelheim, B. 黒丸正四郎・岡田幸夫・花田雅憲・島田照三(訳) 1967(訳1973) 『自閉症 うつろな砦』 みすず書房
- Block, J., Jackson, D., et al. 1958 A Study of parents of schizophrenic and neurotic children. *Psychiatry*, 21, 387-397.
- Call, J. D. 1963 Interlocking affective freeze between an autistic child and his "as-if" mother. *J. Am. Acad. Child Psychiat.*, 2, 319-343.
- Donovan, A. M. 1988 Family stress and ways of coping with adolescents who have handicaps: Maternal perceptions. *American Journal of the Mental Retardation*, 92, 502-509.
- Drotar, D., Baskiewicz, A., Irvin, N. et al. 1975 The adoption of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: A Hypothetical model. *Pediatrics*, 56, 710-717.
- 江幡範子・金丸隆太 2006 軽度発達障害児の親に対する教員の心理的支援—教員と親の支援のとらえ方を手がかりとして— 茨木大学教育実践研究, 25, 305-321.
- Eisenberg, L. 1957 The Father of Autistic Children. *Am. J. Orthopsychiat.*, 27, 715-724.
- Ferster, C. B. 1961 Positive reinforcement and behavioral deficits in autistic children. *Child development*, 32, 437-456.
- 藤川洋子 2000 非行と広汎性発達障害 こころの科学, 94, 76-84.
- 藤川洋子 2005 アスペルガーと虐待の不思議な関係 そだちの科学, 5, 77-81.
- Grandin, T. & Scariano, M. カニングハム久子(訳) 1986(訳1993) 『我自閉症に生まれて』 学習研究社
- Grandin, T. カニングハム久子(訳) 1995(訳1997) 『自閉症の才能開発』 学習研究社
- 蓮見元子 2007 特別支援を必要とする小学生とその母親のカウンセリングに関する事例的研究—高機能広汎性発達障害, 軽度発達障害, 自閉症の子どもの心理教育相談— 川村学園女子大学研究紀要, 18(1), 71-95.
- 樋口智絵 2006 親からみた軽度発達障害児・者の障害理解と自己理解—面接, 自由記述アンケートによる質的研究— 大阪教育大学障害児教育研究紀要, 29, 109-118.
- Holroyd, J. & McArthur, D. 1976 Mental retardation and stress on the parents: A contrast between Down's syndrome and childhood autism. *American Journal of Mental Deficiency*, 80, 431-436.
- 蓬郷さなえ・中塚善次郎 1989 発達障害児を持つ母親のストレスの要因(Ⅱ)—社会関係認知とストレス— 小児の精神と神経, 29, 97-107.
- 今川民雄・古川宇一・伊藤則博・南美智子 1993 障害児を持つ母親の評価と期待の構造 特殊教育学研究, 31(1), 1-10.
- 稲浪正充・西信高・小椋たみ子 1980 障害児の母親の心的態度について 特殊教育学研究, 18(3), 33-39.
- 伊藤良子・木原久美子・森山徹・高野久美子 1997 発達障害児に対するソーシャルサポートシステムの検討 特殊教育施設研究年報, 39-48.
- Kanner, L. 1943(訳2001) 情緒的交流の自閉的障害 十亀史郎・斉藤聡明・岩本憲(訳) 幼児自閉症の研究 黎明書房 91-102.
- 北川憲明・七木田敦・今塩谷隼男 1995 障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響 特殊教育学研究, 33(1), 35-45.
- Klebanoff, L. 1959 Parental attitudes of mother of schizophrenic and neurotic children. *Am. J. Orthopsychiat.*, 29, 445-454.
- 小泉令三・中山健 2004 小学校入学時における軽度発達障害児とその保護者のサポート—母親面接を通しての学校・保護者・地域社会資源連携の検討 福岡教育大学紀要, 53, 199-209.
- 久保紘章 1969 自閉症児の家族研究—特にL.カナーの両親像をめぐって 四国学院大学論集, 16, 81-104.
- 黒丸正四郎・高橋稲子・他 1964 自閉症の家族研究 精神誌, 66, 686.
- Lovaas, O. I., Koegel, R., Simmons, J. Q., and Long, J. S., Some 1973 Generalization and Follow-Up Measures on Autistic Children in Behavior Therapy. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 6, 131-166.
- Lovaas, O. I. 1978 Parents as therapists. In M. Rutter & E. Shopler (Eds.), "Autism A reappraisal of concepts and treatment" 475-495. New York Plenum.
- Marcus, L. M., Lansing, M., Angrews, E., Schopler, E. 1978 Improvement of teaching effectiveness in parents of autistic children. *J. of the American Academy of Child Psychiatry*, 17, 625-639.
- 森口奈緒美 1996 『変光星』 飛鳥新社
- 師田恵美 2005 障害をもつ子どもの発達と親の思い 発達, 26, 79-88.
- 村瀬嘉代子 2006 特別支援教育におけるカウンセリング・マインド—軽度発達障害児への理解と対応— 精神療法, 32(1), 10-17. 宋慧珍・伊藤良子・渡邊裕子 2004 高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちの家族への支援に関する研究—親のストレスとサポートの関係を中心に— 自閉症スペクトラム研究, 3, 11-22.
- 永井洋子・林弥生 2004 広汎性発達障害の診断と告知をめぐる家族支援 発達障害研究, 26(3), 143-152.
- 柳楽明子・吉田友子・内山登紀夫 2004 アスペルガー症候群の子どもを持つ母親の障害認識に伴う感情体験—「障害」として対応しつつ、「この子らしさ」を尊重すること— 児童青年精神医学とその近接領域 45(4), 380-392.
- 中田洋二郎 1995 親の障害の認識と受容に関する考察—受容の段階説と慢性的悲哀— 早稲田心理学年報, 27, 83-92.
- 根来あゆみ・山下光・竹田契一 2004 軽度発達障害の主観的育てにくさ感—母親への質問紙調査による検討— 発達, 25, 13-18.
- 新美明夫・植村勝彦 1985 学齢期心身障害児をもつ父母のストレス—ストレスの背景要因— 特殊教育学研究, 23(3), 23-34.
- 新美明夫・植村勝彦 1987 学齢期心身障害児をもつ父母のストレス—代表事例による母親のストレス・パタンの分析— 特殊教育学研究, 25(2), 29-38.
- 西村辨作 2004 発達障害児・者のきょうだいの心理社会的な問題 児童青年精神医学とその近接領域, 45(4), 344-359. 松為信雄 2001 発達障害児(者)の就労支援 小児の精神と神経, 41,

- 129-138.
- 小椋たみ子・西信高・稲浪正充 1980 障害児を持つ母親の心的ストレスに関する研究(Ⅱ) 島根大学教育学部紀要, 14, 57-74.
- 小澤勲 1984 自閉症とは何か 精神医療委員会.
- Rutter, M. 1968 Concepts of Autism. *J. Child Psychol. Psychiat.*, 9, 1.
- Schopler, E., Mesibov, G. B., DeVellis, R. F., & Short, A. 1981 Treatment outcome for autistic children and their families. In P. Mittler(Ed.), "Frontiers of knowledge in mental retardation - Proceeding of the fifth congress of IASSMD: Vol.1. Social, Education, and Behavioral aspects" 293-301. Baltimor, University Park Press.
- Schopler, E., Mesibov, G. B. & Baker, A. 1982 Evaluation of the treatment for autistic children and their parents. *Journal of The American Academy of the Child Psychiatry*, 21, 262-267.
- Shopler, E., Mesibov, G. B., Shingley, R. H., & Bashford, A. 1984 Helping autistic children and their parents - The TEACCH model. In E. Schopler & G. B. Mesibov (Eds.), "The effects of autism on the family" 65-81. Siegal, B. & Silverstein, S. 1994 "What about me? Growing up with a developmentally Disabled sibling" New York, Plenum Press.
- Short, A. B. 1984 Short-term treatment outcome using parents as cotherapists for their own autistic children. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 25, 443-458.
- 杉山登志郎 2000 自閉症の体験世界:高機能自閉症の臨床研究から 小児の精神と神経, 40(2), 88-100.
- 鈴木乙史・江本美也子 1985 自閉症児の母親の障害受容と人格変容過程に関する研究(その1)—自閉症児の母親の特徴— 母子研究, 6, 48-54.
- 鈴木乙史・江本美也子 1986 自閉症児の母親の障害受容と人格変容過程に関する研究(その2)—ケース分析を中心にして— 母子研究, 7, 58-67.
- 高橋和子 2004 高機能広汎性発達障害児の育てにくさ 発達, 25, 27-32.
- 田中麻知子 1966 幼児自閉症児の家族力動の研究 児童精神医学とその近接領域, 7(4), 1-16.
- 田中究 2006 アスペルガー症候群と子どもの虐待 現代のエスプリ, 464, 168-175.
- 辻井正次 2004 軽度発達障害の就労支援の実際と課題 小児の精神と神経, 43, 205-212.
- 塚田裕子 2006 親と教師のカウンセリングルーム 軽度発達障害が疑われる児童と保護者への対応 児童心理, 60(4), 415-419.
- 植村勝彦・新美明夫 1981 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて—ストレス構造— 特殊教育学研究, 18(4), 59-69.
- 内山登紀夫・水野薫・吉田友子 2002 『高機能自閉症・アスペルガー症候群入門—正しい理解と対応のために— 中央法規出版
- 渡部美緒・藤野博 2007 軽度発達障害児の学級への適応—親のインタビューの質的分析 東京学芸大学紀要, 58, 349-360.
- Williams, D. 河野万理子(訳) 1992(訳1993) 『自閉症だった私へ』 新潮社
- Wing, L. 1996 "The autistic spectrum. A guide for parents and professionals." 久保絃章・佐々木正美・清水康夫監訳 『自閉症スペクトラム—親と専門家のためのガイドブック—』 東京書籍, 1998.
- 山口裕子・内山久美・藤田佳子 2005 軽度発達障害児の親の語りと「親の会」の結束 保健科学研究誌, 2, 41-50.
- 山本智子 2005 人との関係に問題を持つ子どもたち 発達, 26, 89-97.
- 山崎晃資 2006 特別支援教育に求められるもの—軽度発達障害の子どもたちとのかかわり— 精神療法, 32(1), 3-9.
- 山崎せつ子・鎌倉矩子 2000 自閉症児Aの母親が障害児の母親であることに肯定的な意味を見出すまでの心の軌跡 作業療法, 19, 434-444.
- Wikler, L., Wasow, M. & Hatfield, E. 1981 Chronic sorrow revisited: Parents vs. professional depiction of the adjustment of the parents of mentally retarded children. *American Journal of the Orthopsychiatry*, 51, 63-70.
- 吉田孝則 2002 福祉サービス改革 自閉症児・者と家族のレスパイトサービス事業についてこだわる 月刊福祉, 85(10), 70-73.
- 吉田友子 2004 高機能自閉症スペクトラムを持つ子どもへの医学心理学教育—診断名告知の位置づけとその実際— 発達障害研究, 23(3).